

福井迪子著 『一条朝文壇の研究』

工藤, 重矩
福岡教育大学助教授

<https://doi.org/10.15017/11953>

出版情報 : 語文研究. 65, pp.66-66, 1988-06-05. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

《紹介》

福井迪子著『一条朝文壇の研究』

工藤重矩

本書は、平安時代の中でも文学的に高い峰をなした一条朝を生き
た文人の詳細な伝記的論文十一篇からなる。その標題を掲げる。

「菅原輔昭考―和漢兼作の人として―」「菅原輔昭考補遺―金玉
集所収歌をめぐって―」「藤原相如考」「馬内侍私論―交遊を中心に
―」「馬内侍集成立期に関する試論」「大江嘉言考―詠歌活動とその
交友―」「藤原斉信考―文芸面から―」「藤原輔尹考―詩文の人とし
て―」「藤原挙直考―椋橋為義考―道長親近の家司層の生涯―」「菅
原在良考―その伝と文学活動―」

本書の第一の功績は、これらの人々の伝記が可能なかぎり明らか
にされたことである。馬内侍・藤原輔尹には簡略ながら既に伝記的
論文が存したが、他は福井氏によって初めて伝記が作られたと言っ
てよい。しかも、調査は徹底していて、歴史事実としてこれを越え
る論文を書くことは、もはや容易なことではあるまい。馬内侍を除
いて、全て略年譜が付されているのも、特筆すべきことである。

著者の執筆態度は甚だ厳正で、資料に拠らない記述はなく、ひた
すら資料を博捜し、解釈し、穏当な推定を加えてゆく。資料の検討
にあたっては、たとえば『新編国歌大観』『私家集大成』などは随分
信頼できる資料だが、それでも活字をそのまま用いず、写本で確
かめてもいる（P 90・173など）。これは言うに易く行うに難きことの
一つなのである。

「補遺」の一篇と総論にあたる「まえがき」を除いて、全て既発

表論文だが、本書を編むに際して、年表作製、記述の補訂などさま
ざまな加筆がなされていて、その旨が「追記」に明示されている。
初出時の明白な誤りが正されないままの論文集は困ったものだが、
一度手を離れた論文に内容及び補訂を加える困難を考えると、
著者の御苦労は大変だっただろうと想像される。

先行論文に対する引用の仕方、も、広く目を通して、かつ公正であ
る。とかくみだりがわしい現状に我々は馴れつつあるが、本書には
それが無い。あらゆる点で本書は誠実な著作である。

研究史の上からは本書の出現は文壇研究において一つの画期であ
らう。論じられている者達は決して有名な文学者ではないから、こ
の言い方を不審に思われるかもしれないが、まさにその点が新しい
のである。

ここに扱われた者はいわゆる和漢兼作の者である（馬内侍は別だ
が）。だから、歌人としても詩人としても無視されやすい層であ
った。福井氏はこの一群の人々―身分的には受領、家司層で、文学
的には漢学の素養を持ち、状況に応じて詩も歌も作るが、意識とし
ては必ずしも自分を文学者とは規定しない、そういう人々の存在を
一条朝という時代の中で層として把握することによって、文壇を有
名人のみではなく、総体として理解しようとした。

この視点は無かったわけではないが（秋谷朴氏に家司層の文学史
的役割についての先駆的論がある）、多数の具体的人物をまとめて
提示したところに、個別の論文にはない説得力があり（量から質へ
の転化という言葉を思いだが）、これまでの歌壇あるいは詩壇の
研究にはない新しさがある。「文壇の研究」と称する所以なのであ
る。

（昭和六十二年九月、桜楓社、A5判、一五〇〇〇円）